

私の履歴書

前橋江子

9

招くことになった。アンナ先生門下の潮田益子さんと私が選ばれたというのだ。

いったい、どんな基準で選考されたのだろうか。

「ソ連に行きたい」。東西連の音楽家がよく顔を出して冷戦下にもかかわらず、思い込んだ。先生は母国語で祖国のは募った。折しも私が中学に音楽について語り合うのを樂に入った1956年、日ソ共同しみにされていたが、同時に宣言でソ連との国交教え子たちの演奏を彼らに聴が回復する。私はまかせること忘れなかった。

後年、太平正芳元総理の奥様から打ち明けられた。「あなたのこととは以前から存じていますよ。夫が『バイオリンの勉強のためソ連に行きたがっている女の子がいる。何と

訴え続けた留学かなう

「人と比べるな」と斎藤先生

だ何のあてもないのに、代々木にあった日ソ協会でロシア語を学び始めた。

講座は日曜の午後
1時から4時間ぶっ

通しで続いた。私のほかは中
年のおじさんばかりで、教科
書には日常会話ではなく、マ
ルクスやレーニンなどの難し

い話が並んでいる。私はいかにも場違いな子供だし、ちんぷんかんぷんだったが、必死に通い続けた。

飯田橋にあった小野アンナ先生の洋館には、来日したソ

「あなたの国でバイオリンかしてやりたいんだ」と言っ
の勉強をしたいんです」。私
ていました。家で仕事の話は

は弾かせてもらうたびに切々と訴えた。日ソ協会の先生方にも「ソ連に留学したい」と呪文のように唱え続けた。

私にかけけていたのでしょう。私のあずかり知らぬ話だ。

レニングラード音楽院で師

61年の初夏、信じられない話で舞い込んだ。アンナ先生の母校でもあるレニングラー・ワイマン先生が59年に初来日し、アンナ先生邸を訪れたとド音楽院の創立100周年記き、私はワイマン先生の前で

念行事の一環として、初めて演奏している。「ソ連に留学共産圏以外の国から留学生をしたい」と言つと「応援する

よ」と答えてくださった。いた。とはいえ、私が選ばれた理由は分からずじまいである。

ともかく、私は高校を中退して留学することになった。

桐朋の恩師、齋藤秀雄先生から呼び出された。「君ねえ、絶対に人と比べたらいけないよ」と先生は言った。私は少

生から美しい花束が届いて感激していると、桐朋の級友から「これ、小澤さんからだよ」と空気で膨らますピニールの河童の人形を手渡された。道中、寂しくないようにという心遣いだらう。小澤征爾さんらしいユーモアたっぷりの饒別だなとうれしくなった。

A black and white photograph of a woman in the foreground, smiling and looking towards the camera. She is wearing a leopard-print dress with a wide, dark belt and a large, dark, wide-brimmed hat. Her right hand is near her chin. In the background, a large ship is docked, featuring a prominent funnel with a white star on a dark background. Other people are visible on the ship's deck and in the background, including a man in a light-colored shirt and a woman in a hat. The scene appears to be a public event or a film set.

ソ連へ旅立つ筆者（横浜港で）

潮田さんと
2人、客船モ
ジャイスキー
号に意気揚々
と乗り込ん
だ。何十、何
百本のクラフ
ルな紙テープ

しムツとしたし、よく意味が分からなかったが、後にこの言葉を何度も反すうしながら涙を流すことになる。

が船と岸壁を結んでいる。夢の実現に向け、さあ旅立ちだ。ところが、なかなか船が出ない。炎天下、みんなを待た

61年8月、17歳の夏。横浜港大さん橋に大勢の方々が見送りに来てくれた。ソ連に留学するのは珍しかったようであ

せて申し訳ない。じりじりする。まだ出ない。やっと出港したときは、どっと疲れてへたり込んでいた。これからの

マスコミも駆けつけた。
テノール歌手の藤原義江先

私を暗示するような船出だった。
(バイオリニスト)

(バイオリニスト)